

自分の心のありようが社会の現実につながっている

私が『びんぼう神様さま』の物語を最初に書いたのは、今から七、八年前のことでした。そこに至るまでのかれこれ十数年間、私たち家族は夫が脱サラをしたことで、実際に変な貧乏暮らしをしていました。私にとって、それまでの人生で一番厳しい時期でした。苦しい時には苦しいことが重なるもので、経済的に苦しいというのに子どもが入退院を繰り返して、いろいろな人間関係に夫婦共々悩まされ、授かるはずの子どもを続けて失い、恨めしく思うこと、不足に思うことは山のようにありました。そんな状況で、前向きに明るく生きていくことなどそうそうできるわけがありません。過去を悔い、今を憂い、人を責め、自分を責め、先を案じ、落ち込む日々の連続だったと言

っても過言ではありませんでした。本来の貧乏神が大喜びする夫婦喧嘩も少なからずありました。よく、苦労は人を作ると言いますが、苦労だけでは人の心は荒みます。今改めて思いますが、私はとても人に恵まれていたのです。

私の年代の親の多くがそうであったように、戦中戦後を生きてきた両親は、どれほどの辛酸を舐め、生活苦を通りぬけてきたか、どんなに不安に駆られ、天を恨むようなことがあったか、私など想像だにできません。でも私の記憶にある父の姿は力強く自信に満ち、行動は迅速かつ正確でした。母は、身の回りから楽しいものを見つける天才だったのではと思うほど、何があっても脳天気で明るい人でした。私はこの両親にたつぷり、時にはうつつとおしいと

思うほどの愛情を注がれて育ちました。この両親の生きざまが私の生きる力の根底にあります。

そして夫。何かがあった時、夫の口癖は「必要あってのことだよ、きつと。人生は授業みたいなもんさ。課題だと思っただけでいけばいいんじゃない？」そんな夫の言葉に時には怒ったり、呆れたり、諦めたり…。考え直して勇気づけられたり…。

それから二人の子どもたち。私たち夫婦が子どもたちの幼児期、唯一たっぷり与えることができたものは愛情だけでした。そしてこの子たちが私たちに教えてくれた最も重要なことは、私たちがいかに感謝すべき物事に囲まれて生きているかということでした。子どもたちは「こんなことに？」と思う

ようなものに満足し、実にすなおに「有り難うございます」と言うのです。それは、二人とも成人し、暮らしも楽になり、子どもたちの願いはほとんど叶えてやれるようになった今も変わりません。これは私たち夫婦の何ものにも替えがたい宝であり、誇りです。

苦しい時期を乗りきっていくプロセスで私は、人に、物に、出来事に、どれほど多くの感謝すべきものがあるかを学びました。そして、気がつくとならずに不足に思う心や憂える心がなくなっていたのです。マイナスの心が感謝の心に変わる分だけ、経済の問題も人間関係も、雪が溶けていくように解決していきました。そこには、いつも心を前向きに転換させることができるように助言してくれた善き師や善き友との出会いもありました。そうして、この十数年の体験が、『びんぼう神様さま』を書く原動力になったのです。

この時期に私が学んだことはもう一

*

つあります。現実がいかに自分の心の状態を反映しているか、ということです。家の中で起こっている問題は、人間が直面している大きな問題にまでつながっているように思えます。家庭の中には人間の根源的な課題が用意されているのではないか…：スケールがどんなに大きくなっても、どんなに複雑になっても、それはただ拡大鏡で見たにすぎないという気がするのです。個人が足りない足りないと思えば、社会全体が物・金中心の社会になりますし、小さな争いの心も、思い通りにならなければ力で押し通すようなことを繰り返せば、戦争の心につながります。

今、人間はこの地球に生かし続けられてもらえるかどうかの岐路に立たされているように思えます。資源を使いつくし、食いつくし、便利さを求めては自然を破壊し、社会が悪くなったと他を責め、挙句は戦争です。

でも、そのようになった原因は自分の中にもあると私は思っています。自分の心の中で起こっていることが社会

の現実につながっている、それは恐ろしくもあり、また素晴らしくもあることです。だからこそ私はきれいな心の持ち主になりたいし、また希望のないような所からでも、夢を実現できる実践力と知恵を持ちたいと思います。そうすることが地球の未来の希望につながっていくように思えてならないのです。とてつもなく大きな夢を思い描きながら、日々小さなことを地道に積み重ねていく、そんなふうになんか思っています。私の母のように脳天気な、父のように堅実で緻密に…。

若い頃は「していただく」ばかりだった生き方を、今ようやく「させていただく」生き方に転換していけるようになりまし。どんなに大きな問題も、見方を変えれば困難と思えなくなることを知った今こそ、「中年の壮志」を実現する時、と思っています。

高草洋子(たかくさ ようこ)

富山県生まれの東京育ち、兵庫県在住。著書に『びんぼう神様さま』『風と琴(地湧社)』